富士見市域の模骨文字瓦　－富士見市栗谷ツ遺跡・東台遺跡発掘資料より－

三芳町立歴史民俗資料館　越前谷　理

はじめに

富士見市栗谷ツ遺跡・東台遺跡の 2 遺跡の発掘資料の中から、新たに確認された「模骨文字のある平瓦」（以下、「模骨文字瓦」という）について資料紹介をする。富士見市域で模骨文字瓦が確認されたのは初めてであり、ここでは基礎的な事実記載を中心に報告をする。

三芳町立歴史民俗資料館では、平成 19 年度秋の企画展として、三芳町新開遺跡（第 1 図）の発掘資料を中心に、平安時代の須恵器生産をテーマとした展示を実施することとなった。その展示構成の中で、隣接する地域の例として、富士見市の栗谷ツ遺跡や東台遺跡から出土した須恵器や瓦との比較検討を試みるため、水子貝塚資料館へ事前調査に伺った。当初は、発掘調査報告書に掲載された資料を対象とした調査であったが、館側のご厚意により、栗谷ツ遺跡 1 号窯跡については報告書未掲載の一括資料についても拝見させていただく機会を得た。この時、栗谷ツ遺跡 1 号窯跡の一括資料の瓦片の中から、模骨文字瓦 2 点を確認することとなった。更にその後、水子貝塚資料館隈本健介氏の調査によって、東台遺跡からも模骨文字瓦が 2 点出土していることが確認された。

以下に、栗谷ツ遺跡で 2 点、東台遺跡で 2 点確認された模骨文字瓦について紹介する。

１．模骨文字瓦とは

古代の瓦葺建物の屋根は「本瓦葺き」といい、緩やかな湾曲をもつ板状の平瓦と、円筒を縦に半截（半分に）した形の丸瓦が全体量の圧倒的多数を占める[(1)]。丸瓦も平瓦も丸みをもった形に作られるのであるが、この丸みを作り出すために、丸瓦は円筒形の型に粘土を巻きつけて、後に半截する「桶巻き作り」という技法がとられる。一方、平瓦も桶巻き作りによって 4 枚分割する方法で作られていた時期もあったが、およそ 8 世紀末頃から次第に、緩やかな湾曲をもつ凸型成形台の上に、粘土紐もしくは粘土板を載せて形作る「一枚作り」という技法に変わっていった。

桶巻き作りで粘土を巻きつける型に関しては、中国の文献を検証して「模骨」と呼ばれており（大川 1958）、その名称を転用して、一枚作りの平瓦の成形台についても「模骨」と呼ぶことが多い。この一枚作りの凸型成形台（以下、模骨という）に彫り込まれた文字に粘土が充填され、瓦に転写されたものが模骨文字である。

この模骨文字瓦のように、文字が記された瓦を総称して、「文字瓦」と呼んでいる。文字瓦には、模骨文字のほか、墨書（朱墨による文字が多い）やヘラ書き（先端が尖った道具で文字を記す）によるもの、押印（角印や円形印）・叩き具（瓦の凸面を叩きしめる工具）などに刻まれた文字の転写によるものがある。記される文字の内容としては、地名（国・郡・郷名など）・施設名（役所・寺名など）・人名と推定されるものが多い。

２．富士見市域出土の模骨文字瓦

(1) 遺跡・遺構の概要（第１図）

ここではまず、模骨文字瓦を出土した遺跡と遺構について概略を触れておく。

栗谷ツ遺跡は、富士見市西みずほ台・針ヶ谷・水子に広がる遺跡で、細長く開析された小支谷の北側台地上に位置する。これまでの調査で、旧石器時代・縄文時代・弥生時代後期～古墳時代初頭・平安時代の各時代の遺構・遺物が検出されている。平安時代のものとして、住居跡 41 軒と窯跡 1 基が確認されており、集落跡の一部は、隣接する正網遺跡・別所遺跡に繋がる可

能性も示唆されている。

模骨文字瓦が出土した第 5 地点 1 号窯跡は、南東へ緩い傾斜をもって突出する台地の先端に位置する。燃焼部は残っておらず、確認されたのは焼成部と煙出し口のみの残存長 3.6m であった。窯内及び灰原(はいばら)から須恵器坏・耳皿・軒平瓦・「入」の字が刻まれた平瓦などが出土したが、遺物の出土量自体はそれほど多くない（会田ほか 1979)。

東台遺跡は、富士見市水子に広がる遺跡で、柳瀬川を南に望む台地縁辺部に位置する。これまでの調査で、旧石器時代・縄文時代前期・弥生時代後期・平安時代・中世の各時代の遺構・遺物が検出されている。平安時代のものとして、住居跡 47 軒・溝跡 31 条・土坑多数が検出されており、9 世紀から 10 世紀にかけての市内有数の集落遺跡であるといえる。出土遺物は、須恵器のほか灰釉(かいゆう)陶器、紡錘車、土錘、鉄製鎌、瓦塔(がとう)片などが出土している。

模骨文字瓦は、第 15 地点と第 18 地点の調査で出土している。第 15 地点で確認された平安時代の遺構は、概ね 9 世紀末から 10 世紀初頭にかけての住居跡が 11 軒と多数の土坑である。模骨文字瓦が出土した第 34 号住居跡は、調査区の中でも住居跡が集中する範囲で確認された。第 18 地点では、平安時代に属する遺構は、住居跡 1 軒とそれを切る溝跡が 1 条確認された。模骨文字瓦が出土したのは第 3 号溝であるが、住居跡の遺物が流れ込んだ可能性もある。

(2) 富士見市域出土の模骨文字瓦

①逆字「上」（第 2 図 1)

栗谷ツ遺跡第 5 地点 1 号窯跡出土の資料である。縦 9cm ×横 7.5cm の破片で、胎土は緻密、焼成は良好で焼き締まっている。凹面狭端縁にケズリを施している。また、凸面の一部に棒状の工具で引いてつけた筋が数条認められる。

模骨文字は、3 画目 [2] の横線右半分を欠損するが、縦 2.7cm ×横 3cm ほどの大きさを示すものと考えられる。1 画目の縦線が乾燥の段階ですれて布目がつぶれているものの、文字の盛り上がりは比較的しっかりしている。1 画目の縦線は直線ではなく、2 画目との合流点から若干右に曲がっている。更に、この模骨文字の最大の特徴が、狭端面から 4cm に文字の中心が位置しており、他の類例と比較すると、かなり狭端面に寄っている。

文字の判読については、企画展開催当時は「土」として紹介したが、今回の追加調査によって、逆字の「上」であることが確認された。根拠としては、2 画目の横線が 1 画目の縦線を突き抜ける痕跡が見られないこと、南多摩窯跡群出土の模骨文字瓦の中に、当該資料と近似する字体の逆字「上」が報告されていることなどによる [3]。

②「土」ヵ？（第 2 図 2)

栗谷ツ遺跡第 5 地点 1 号窯跡出土の資料である。縦 9cm ×横 8cm 程の破片で、胎土は緻密、焼成は良好で焼き締まっている。凹面及び凸面に、ひび割れを補修するため乾燥段階で施されたと思われるナデ痕跡が確認された。

模骨文字については、欠損しているため断定はできないが、類例からおそらく「土」であろうと考えられる。全体的に文字の線が細く、しかも粘土の盛り上がりが少ない。狭端面から文字の中心（現存部）までの距離は 8cm である。

③逆字「土」(異体字)ヵ？（第 2 図 3)

東台遺跡第 15 地点第 34 号住居跡出土の資料である。第 34 号住居跡から出土した遺物の量は少なかったが、9 世紀第 4 四半期と推定される須恵器坏に伴って、模骨文字瓦が出土している。わずか 5cm 程の小破片であり、凸面も欠損しているため、製作技法についてはほとんど不明である。

文字の天地については、残存部の湾曲や字体の特徴

などから、図のように推定した。縦線に対して、上の横線は縦線と十字に交差し、下の横線は縦線で止まっている。いずれの横線とも、縦線よりも高く盛り上がっている。

この模骨文字については、欠損しているため字体の判読は難しいが、「土」の異体字（1 画目と 3 画目の横線の間に、点もしくは線が入る字体）の逆字ではないかと推測される。類例については、『武蔵国分寺古瓦塼文字考』（大川 1958）に不明文字として掲載されている例[4]が考えられる（第 2 図　参考資料）。文字の判読及び類例については、多くの方のご教示を願いたい。

④逆字「千」（第 2 図 4）

東台遺跡第 18 地点第 3 号溝跡出土の資料である。9 世紀末と推定される須恵器坏・土師器甕とともに、模骨文字瓦が出土している。縦 10cm ×横 17cm の破片であり、胎土は密、焼成はやや不良である。凹面側端縁及び凸面側端縁に面取りのためのケズリを施している。凹面には、模骨のキズによると思われる段差が確認される。

模骨文字は、一部を欠損するものの、逆字の「千」であると考えられる。文字の特徴として、1 画目が先端に向けて次第に細くなる。また、1 画目の斜線と 2 画目の横線の盛り上がりが高く、3 画目の縦線は低くなっている。なお、側端縁から文字の中心までの距離がおよそ 14.5cm であり、当該時期の平瓦の大きさ（幅）から推定すると、ほぼ左右の中心に位置するものと考えられる。

３．資料の観察結果

(1) 製作技法について

今回紹介する資料はすべて破片であるために、瓦の製作技法について通観することは難しい。

その中でも、端面（狭端面・側端面）を残す資料について見てみると、凹面・凸面とも端縁部にナデやケズリを施すという共通の技法が認められる。また、凸面には、縄紐を巻きつけた叩き具によってついた縄目の圧痕が残るが、叩く手順として上（狭端縁）から下（広端縁）へ連続するもの（第 2 図 4）、左上から右下に連続するもの（第 2 図 1）、右上から左下に連続するもの（第 2 図 2）と、叩き方に 3 通りの技法が確認された。

更に、端縁部とそのほかの部位を比較すると、端縁部のほうが厚さが若干薄い。上述したように、叩く手順の観察から、狭端縁→中央（→広端縁）[5]という叩きの順序が推察される。これにより、狭端縁で押し出された余剰粘土が中央や広端縁に向けて順次送られ、結果として端縁部（狭端縁）の厚さが中央部に比べて薄くなると考えられる。

この叩き方と厚さの関係について、注目すべき見解がある。寄居町の桜沢窯跡からは、模骨文字瓦として逆字の「上」が出土しており、平瓦の端縁部が中央部より厚く作られるという特徴を有している。報告書をまとめた昼間孝志氏は、端縁部の厚みは、製作台上（模骨上）に彫り込まれた模骨文字を、瓦の凹面に浮き上がらせるために強く叩いた結果による可能性があると指摘している（昼間 1994）。富士見市域出土資料とは厚薄が逆であるが、模骨文字の付加と製作技法を関連付けて考えるという、非常に示唆に富む指摘である。

以上のように、製作技法の点から窺われる平瓦の特徴を挙げた。製作技法上の特徴が他の平瓦についても言えることかどうかは、栗谷ツ遺跡及び東台遺跡をはじめ、同時期の周辺遺跡から出土する平瓦についても観察する必要がある。

(2) 模骨文字の特徴

模骨文字の特徴として共通するのは、注意して観察しなければ見落としてしまうほど、目立たず不鮮明であるということである。これは、平瓦の製作技法に起因すると言える。平瓦の制作時に、型から瓦を外しや

すくするため、模骨の上に布をかけ、その上から粘土を載せる。このため、模骨に彫り込まれた文字への粘土の充填は布を介することとなり、模骨文字が盛り上がりの低い不鮮明なものとなってしまう。

更には、各文字とも盛り上がりが僅かであるとともに、各文字の中で線の盛り上がりが一定ではない。縦線と横線を比較すると、第 2 図 1 は縦線の方が高く盛り上がり、ほか 3 点については横線の方が高く盛り上がっている。このことは、模骨に彫り込まれた線が、第 2 図 1 の場合は縦線が深く、そのほかの 3 点については横線が深いことを示している。模骨に文字が彫り込まれる過程で、彫り込む線の深浅が意識されていたと想定される [6]。模骨に刻まれる線の深浅がどのような意図を持つのかは、文字の彫り込み方も含めて、類例の詳細な観察を重ねて改めて検討したい。

また、模骨文字には、筆で書いた文字の特徴が見られる。第 2 図 1 の逆字「上」の 1 画目の縦線は、直線ではなく若干曲がり、第 2 図 4 の逆字「千」の 1 画目は先端に向けて漸次的に細くなる。このことは、払いや筆運びなど、模骨に下書きされた墨書文字の形どおりに彫り込んでいることを示すと考えられる。線の太さについては、逆字「千」の 1 画目の先端等を除くと、各文字の中でほぼ一定の太さであると言える。

字体の解釈から読み取れる特徴としては、4 点中 2 点（第 2 図 3 の字体の解釈が正しければ 3 点）が逆字であるということである。また、第 2 図 2 の「土」のように、正逆の判断がつきにくい場合もあるので、あるいはすべてが逆字ということもあり得るかもしれない。ただし、他の遺跡の例を見る限りでは、正字と逆字の両者が存在しているので、正字と逆字が混在していても問題はない。

4. 模骨文字瓦に関する予察

今回は、上記 4 点の資料について観察した結果を報告するものであり、現時点での情報だけでは、到底模骨文字瓦に関する考察は十分なものとなり得ない。そこで、ここでは、模骨文字瓦の研究によって何を明らかにしうるのか、今後の見通しを自分なりに整理することで、考察に代えたいと思う。

模骨文字瓦の類例を調査することは、当時の瓦生産体制の一端を明らかにしうるものであると考える。特に、富士見市周辺では、軒平瓦や軒丸瓦などこれまで瓦研究の中心となってきた遺物の出土がほとんどなく、その生産の系譜や時期は不明確であった。模骨文字瓦の類例を比較検討することで、系譜や時期などを、窯跡をはじめとする他の遺跡との関連の中に位置づける一つの指標となるのではないだろうか。寺院など消費地からの出土例と比較すれば、生産と供給の関係性も考えられるであろう。ただし、模骨文字の特徴（大きさや形）が一致するからといって、直ちに富士見市域で製作された瓦が運ばれたとは限らないことはいうまでもなく、模骨を有する工人や模骨が他の窯場へ移動するという、当時の瓦生産体制のあり方も想定しなければならない。他の遺跡との関連においては、模骨文字の特徴だけではなく、胎土や製作技法についても詳細に観察する必要がある。

また、第 2 図 4「千」の模骨文字瓦の凹面に見られるように、類例の中には模骨にキズが残る資料も多い。キズの有無・進行具合によって、模骨の同定や模骨の移動、窯の先後関係を推測することも有効な手段となるであろう [7]。

模骨文字にどのような文字が選択されているかということにも注意を払う必要がある。試しに、各報告書の中から模骨文字瓦の類例を拾い上げてみると、分布は広範囲にわたるものの、付加される文字の種類はかなり限定されることがわかる [8]。模骨文字の意味については、これまで先学諸氏によって、押印や叩き具・ヘラ書き文字と同じく、郡名や郷名・人名を表すという解釈が示されている（坂詰 1971 ／有吉 1986 ／市毛 1990 など）。しかし、今回紹介した「土」や「千」の模骨

文字や類例の中には、地名や人名として捉えることが難しい文字もある。また、模骨文字の盛り上がりはわずかで不鮮明であること、模骨文字に逆字が多いことなども、模骨文字の意味を考える上で考慮されるべき点であると思われる[9]。模骨文字の意味については、文字瓦だけでなく、墨書土器など他の文字資料の例も参照しつつ、一つの解釈にとらわれない多角的な視点が必要とされる[10]。

おわりに

今回は、富士見市域で初めて確認された模骨文字瓦について、資料紹介を中心に報告を行った。時間的制約から当該資料を十分に観察しきれず、類例についてもほとんどの資料を実見することができていないため、不十分な内容となってしまったことは否めない。今後は、類例についても、模骨（模骨文字）や瓦の製作技法・胎土などを詳細に観察し、総合的な見地から検討を進めていきたいと思う。

また、今回紹介した資料は小さいもので 5cm 程の破片ではあったが、そこから得られる情報は、当該地域の窯業史を考える上で非常に重要なものである。報告書に掲載されない小破片についても、疎かな扱いはできないということを改めて実感した。

検討課題を多く残す形となってしまったが、今回の報告が、後の資料増加に少しでも寄与することができれば幸いである。

最後になったが、今回の報告にあたり、水子貝塚資料館には貴重な執筆の機会を与えていただいた。また、資料調査・原稿執筆にあたり、多くの方々にご教示を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。

協力者・関係機関（順不同・敬称略）

赤熊浩一　大久保淳　隈本健介　栗原淳　田中広明

早坂廣人　昼間孝志　松本富雄　柳井章宏

(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

註

(1) このほかにも、軒先に葺く軒平瓦や軒丸瓦をはじめ、堤瓦・面戸瓦・鬼瓦など屋根の部位によって瓦の種類はいくつかに分けられる。

(2) ここでの画数は正位の字の書き順とする。

(3) 準備時間の制約から資料を実見したわけではなく、報告書上での確認であるために、あくまでも近似という表現にとどめる。

(4) 大川清氏は、「「主」のようにもみえる」としている。

(5) 広端面が残存する資料がないため、中央部から広端縁という移動は、他の資料からの推定である。

(6) 桜沢窯跡出土の「上」の模骨文字瓦を実見させていただいたところ、3 画目の横線の盛り上がりが一番高く、2 画目の横線は細く、盛り上がりも低いという明確な差が認められた。

また、模骨文字の高低については、粘土の詰まり具合の差とも考えられたので、模骨の文字部分の模造を製作して実験してみた。結論として、彫り込みの深浅の差をつけないと、資料のような模骨文字の高低差は現れないことが確認できた。

(7) 例えば、三芳町新開遺跡からは「大」の模骨文字瓦が発見されているが、この遺跡の北西約 1km に位置する俣埜遺跡の工房跡から、「大」の模骨文字も模骨のキズも一致する瓦が出土している（松本ほか 1981 ／松本 1984)。模骨の一致は、単に 2 つの遺跡の共通する遺物という事実にとどまらない、新開遺跡の窯業生産構造を考える上で重要な情報であるといえる。

(8) 報告書掲載の主な模骨文字瓦は、下記のとおりである。

三芳町新開遺跡・俣埜遺跡…「大」

入間市新久窯跡…倒立・逆字「上」/「中」/「大」/「天」など

入間市霞川遺跡…倒立・逆字「上」/「山万」

所沢市お伊勢山遺跡…「山万」

寄居町桜沢窯跡…逆字「上」

南多摩窯跡群…「土」/逆字「上」/「上」/「山万」/「大」/「工」など

武蔵国分寺跡…逆字「上」/「上」/「山万」/「大」/「中」/「土」/「天」など

(9)　逆字の出現する解釈として、昼間孝志氏は「社会環境の変化などによって生産地点が分散し、主要生産地から離れた地域での生産の可能性が考えられる場合は、逆字などの不備が生まれることも否定できない」(昼間 1994)としているが、逆字を不備という解釈で捉えるかどうかは検討の余地がある。

(10) 時期はやや異なるが、栗谷ツ遺跡や東台遺跡からは、「千」や「大」が書かれた墨書土器が出土している(早坂 2007)。

参考文献

会田明・佐々木保俊・田代隆『針ヶ谷遺跡群Ⅰ』富士見市遺跡調査会調査報告第 6 集, 1979

有吉重蔵「遺瓦からみた武蔵国分寺」『国分寺市史　上巻』, 1986

市毛勲「(2)「山万」瓦」『お伊勢山遺跡の調査　第 4 部弥生時代から平安時代』早稲田大学所沢校地文化財調査室, 1990

大川清『武蔵国分寺古瓦塼文字考』早稲田大学考古学研究室報告第 5 冊, 小宮山書店, 1958

大川清『古代のかわら』窯業史博物館, 1996

加藤秀之・隈本健介『富士見市内遺跡Ⅳ』富士見市文化財報告第 47 集, 1996

隈本健介・早坂廣人『富士見市内遺跡Ⅵ』富士見市文化財報告第 49 集, 1998

斉藤祐司編『霞川遺跡』入間市埋蔵文化財調査報告第 8 集, 1988

坂詰秀一編『武蔵新久窯跡』雄山閣出版, 1971

八王子市南部地区遺跡調査会『南多摩窯跡群　八王子みなみ野シティ内における古代窯跡の発掘調査報告Ⅳ』2001

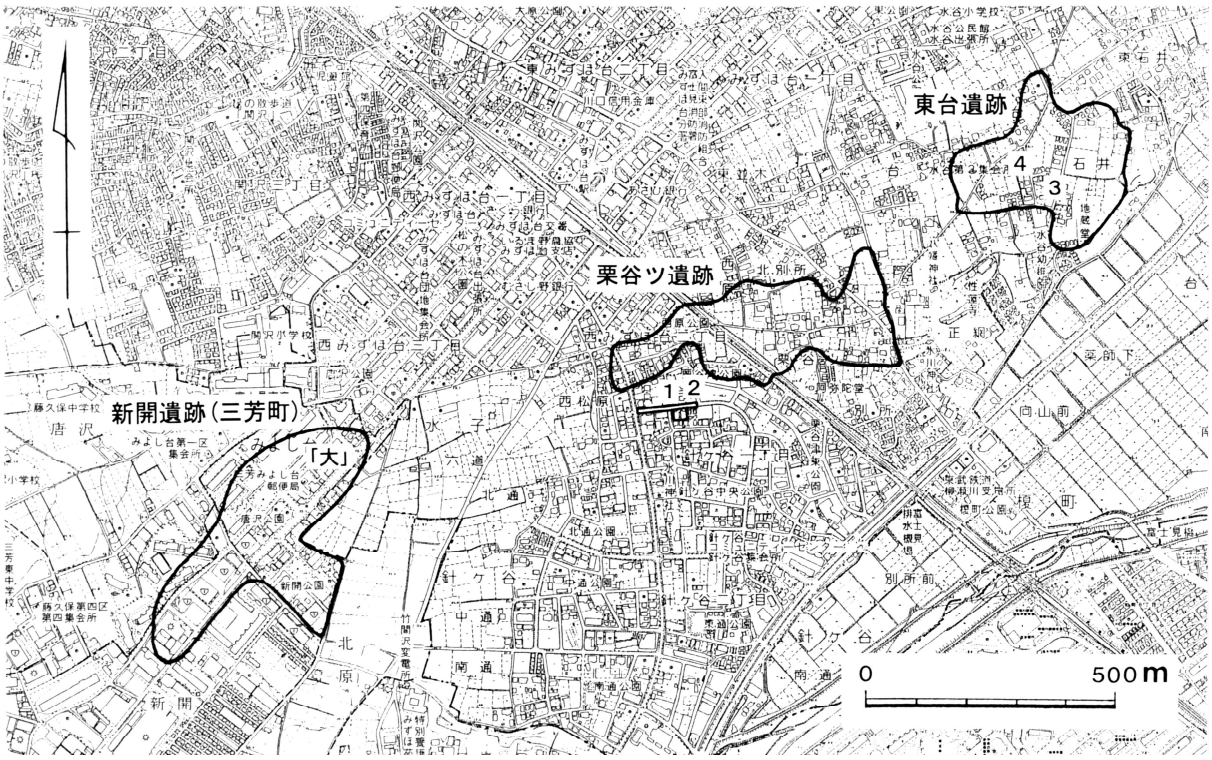
早坂廣人『平成 18 年度企画展図録　文字 鉄 仏教 −富士見の“古代化”−』水子貝塚資料館, 2007

昼間孝志『桜沢窯跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 143 集, 1994

松本富雄ほか『新開遺跡Ⅰ』三芳町埋蔵文化財報告 11, 1981

松本富雄「俣埜遺跡」「新開窯跡」『新編埼玉県史　資料編 3』, 1984

森　郁夫『瓦』ものと人間の文化史 100, (財)法政大学出版局, 2001



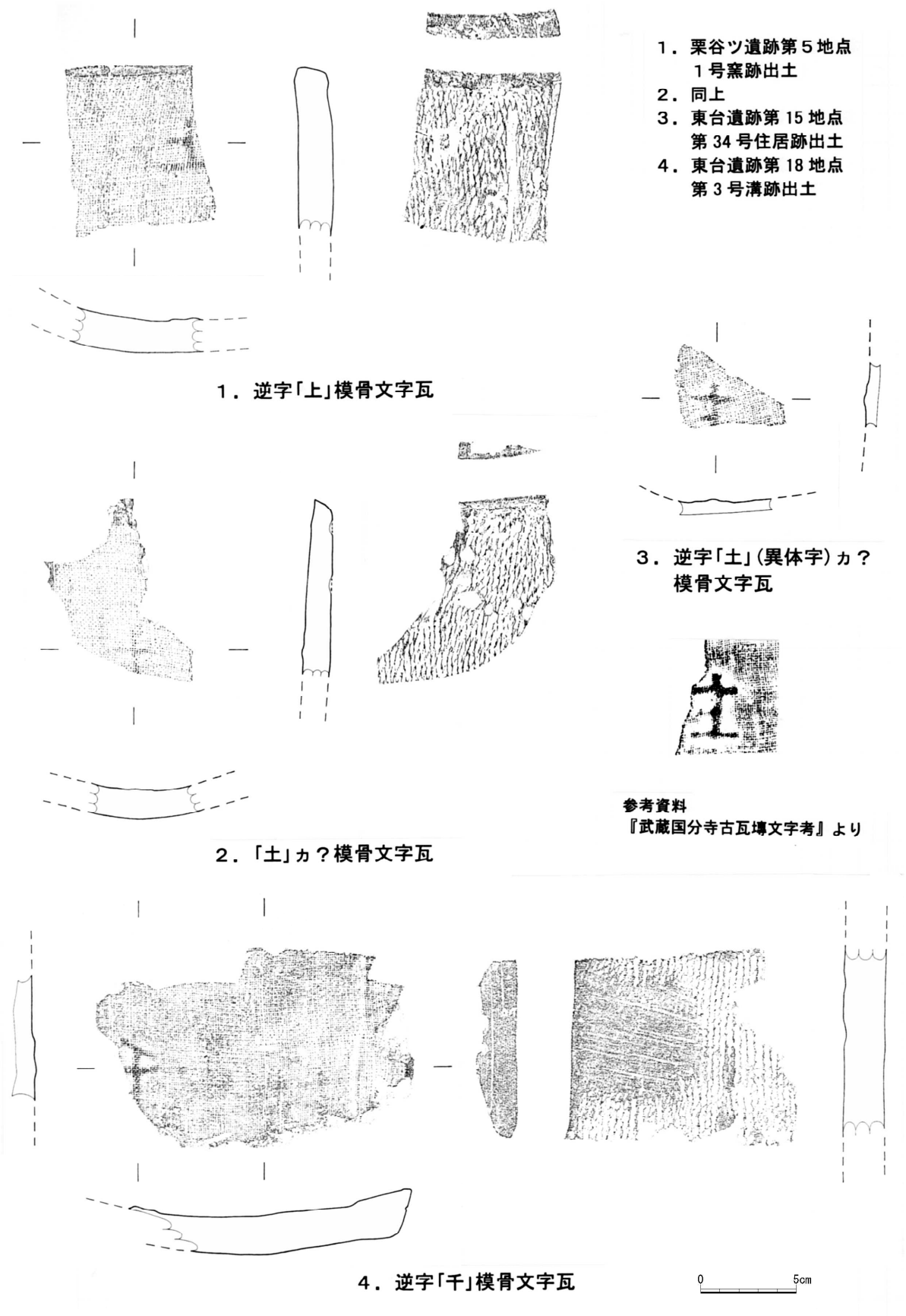
第１図　模骨文字瓦が出土した遺跡（数字は第２図に対応）

図版番号 遺跡・遺構	残存縦 横(cm)	厚さ (cm)	凹面の特徴 (布目は3cm四方本数)	凸面の特徴 (縄目は3cm四方の本数)	端面の特徴	備　考
第２図１ 栗谷ツ遺跡 １号窯跡	9.0 7.5	端部 1.7 中央 2.2	布目 22 × 21 本 狭端縁にケズリを施す	縄目９本 縄目上に棒状工具による筋が見られる 狭端縁にナデを施す 狭端縁が盛り上がる	狭端面にナデ調整による面取りを施す	灰褐色 焼成良好　焼き締まる 胎土緻密　白色砂粒を多く含む
第２図２ 栗谷ツ遺跡 １号窯跡	9.0 8.0	端部 1.3 中央 1.5	布目 25 × 22 本 ナデによるひび割れの補修痕が見られる	縄目 10 本 ナデによるひび割れの補修痕が見られる 狭端縁にケズリを施す	狭端面にナデ調整を施す	暗灰褐色 焼成良好　焼き締まる 胎土緻密　微細砂粒を多く、1mm 大の砂粒・金雲母粒を若干含む
第２図３ 東台遺跡 第 34 号住居跡	4.7 5.7	―	布目 24 × 25 本	―	―	暗灰白色 焼成やや良 胎土やや密　微細砂粒を多く、2mm 大の砂粒を若干含む
第２図４ 東台遺跡 第３号溝跡	10.0 17.0	端部 2.1 中央 2.4	布目 25 × 26 本 側端縁にケズリを施す 模骨のキズによる段差が見られる	縄目７本 表面の一部に焼成後の研磨痕が見られる 棒状圧痕あり 側端縁にケズリを施す	側端面にケズリを施す	灰白色 焼成やや良 表面は砂っぽい手触り 胎土やや密　微細砂粒を多く含む

表１　富士見市内出土の模骨文字のある平瓦の観察表

図版番号	模骨文字	残存縦×横(cm)	線太さ(cm)	線の高低	備　考
第２図１	逆字「上」	2.7 × 2.4	0.4 ～ 0.5	縦：高　横：低	狭端面から 4cm に位置する
第２図２	「土」カ	2.3 × 2.0	0.2 ～ 0.3	縦：低　横：高	狭端面から 8cm に位置する
第２図３	逆字「土」(異体字)カ	2.3 × 2.3	0.3	縦：低　横：高	
第２図４	逆字「千」	3.6 × 2.0	0.3	縦：低　横：高	側端面から 14.5cm に位置する

表２　模骨文字観察表



第２図　富士見市内出土の模骨文字瓦（S=1/3）